

## ことば配り

2024. 1. 10

以前から興味があったサッカーチームがある。熊本県立大津高等学校サッカー部である。指導者は、「社会に出て活躍できる人材を育てる。我々はそこにサッカーというツールを使って取り組んでいるにすぎません」と語る。平岡和徳総監督である。この学校は、全国高等学校選手権大会の常連校で、Jリーグ選手をこれまで60人以上輩出している強豪校である。「凡事徹底」「年中夢求」「24時間をデザインする」を柱とし、「諦めない才能を育てる」をコンセプト・理念として掲げ、日々活動している。

いろいろと驚かされるのだが、毎日の部活動の時間は100分間である。そのあとの自主練習も厳禁である。こうなると、限られた時間の中で、部員たちは余力を残さずベストを尽くす。終わりが明確に決まっていることで、その時間を目いっぱい頑張ることができ、その分クオリティーも上がるという。

現在の部員数は、238人である。110人の新生が入部した。練習メニューや年間の試合の数も全員が平等である。その中で、カテゴリーをきちんと分けて、レベルに適した指導をする。差別ではなく、適切に配慮し区別することがモチベーションや向上心につながる。

練習の最後の20分くらいになると、いいプレーをした選手を徹底的に褒める。笑顔で練習が終われば、チームの雰囲気も落ちずに、何より明日へのやる気につながる。また、笑顔には人の力を引き出し、物事を好転させる力がある。何ならその先の奇跡まで呼び込むかもしれないという。

目配り、気配り、心配りはよく聞く。そこに「ことば配り」も加えることが指導者にとって重要なことだという。例えば、おはよう、ありがとう、大丈夫、グッジョブ、ナイスライなどは、全部1秒で言えることばである。たった1秒のことばが、人と人をつないで夢中を引き出す。一言の重みをつけるためには、指導者自身も学びを継続することが大切である。元サッカーフランス代表監督のことばで、「学ぶことをやめたとき、教えることをやめなければならない」というものがある。これがすべてだという。

平岡総監督は、大津高校サッカー部をこう表現する。「すべての選手の成功は約束できないけれど、すべての選手の成長を約束できる場所」また、こうも言っている。「全員が、自分の限界突破力を磨き、主体性を身につける。これが諦めない才能を育てるということ。子どもたちの未来に触れているという深い自覚を指導者の中心に置くことで、考動力も変わり、その本気度を子どもたちは必ず感じ取ります」そして、現役生や卒業生にとって、一つのふるさとであり続けたいと言う。

「私の特技は、これまでの教え子たちの名前をすべて覚えていて、本人たちが感激するくらい当時の話ができることです。時がたっても、サッカーに出合えてよかった、大津高校サッカー部で過ごせてよかったと思ってもらえるような指導がしたい。私自身もサッカーの魅力に惹かれ導かれている人生です。まずは私がお手本になるような一生を送ることが重要だと思います」

これからの部活動を考えるときに、大津高校サッカー部から、そして、平岡総監督から学ぶべきことは多い。